◆「家族史」による歴史の体感の試み

祖父母の名前を言えない人は少ないだろうが、曾祖父母の名前を全て言える人は珍しいのではないだろうか。合計で、4 組 8 人いるはずである。かなり特別な場合を除いて、その 8 人の一人が欠けても自分が生まれることはない。自分という存在の前提条件のような人たちだ。

筆者の場合、曾祖父母たちは私が産まれるまでに皆亡くなってしまっているので、かれらの生涯は、私が同時代人として生きることのなかった「歴史」の時代にある。

また、その次の世代である祖父母たちは 2 組 4 人で、こちらは全員どんな人だったかをある程度知っている。そして、かれらの人生の全てではないが、その一部は、自分が生きている時代にも重なる、もしくは強い影響を与えた「同時代史」である。

日本の近現代史にも重なっているそれらは、「体感する歴史」のための重要な素材とすることができるのではないだろうか。8 人＋4 人いれば、全員調べればそれなりのバリエーションになるはずである。あたりまえのことだけれども、曾祖父母というのは、自分の父母にとっての祖父母なのだから、自分が自分の祖父母を知っている程度には、かれらも祖父母について知っているはずだろう。自分の父母から聴き取りを少し行うだけで、曾祖父母たちの「歴史」が相当分かるはずである。

私の父方の曾祖父についていえば、今でいう「ネトウヨ」のような人であったらしい。

彼が遺したメモを祖父がまとめた『業余録』によると、彼は雑誌『日本及日本人』の愛読者であり、三宅雪嶺に手紙を書き、返事を貰ったりもしたようだ。彼は新潟県の山間部にある農村においていわゆる地主階級であったが、最上層、つまりいわゆる豪農ではない。そんな彼から溢れるのは、当時の世の中に対する憤懣である。つまり、財閥の進める日本の産業化が、農村の良き秩序を破壊しているというのである。そして総力戦体制の構築が推し進める平準化･下降的均質化は、彼のような農村の小有力者の地位を危うくしている。

そうした変化のなかで、彼は「農業」に専念するのではなく「教育」を職業とする選択を取った。（爾来筆者に至るまで、教育を生業としている家系ということになる）曾祖父は師範学校を出ていなかったが「代用教員」になれたのである。

そんな彼が日本の軍国主義を支えたというのであれば、丸山真男のいう「亜インテリ」にあたるだろうか。財閥の横暴に腹を立て、地域の秩序の変化を悪しきものとして憂え、さにありながらも、地域の小リーダーという、最もパワフルな小分子として戦時体制に協力していったのである。

いっぽう、その息子である私の祖父は師範学校（新潟県高田師範学校）を出ている。地方の小地主階級の職業としての選択された「教育職」は、上記の変化のなかで社会的地位を保つためでもあった。彼は地元の中学校の校長も務めている。

そして思えば祖父は、新潟を地盤とする政治家･田中角栄を憎む労農派（社会党支持）だった。祖父は言う、「田中角栄は農村の古き良き秩序を破壊した」と。高度経済成長に伴う冬季の出稼ぎは、雪国の農村に現金収入をもたらした。村には、急に羽振りが良くなった人びとが増え始める。だが教師である彼自身は農閑期だからといって出稼ぎに出るわけにはいかなかった。

曾祖父と祖父とは、常に何かを「古き良き秩序の破壊者」として呪っていた。教育を職とすることで社会的地位を保つことを選択した人びとではあったが、その息子（筆者の父、1930 年代後半生まれ）は、相対的に高い文化資本を受け継ぎながら、ついに農村を離れる決心をしてしまう……。これが私の「ルーツ」のひとつである。

いかがだろうか。「歴史を体感する」方法の一つとしての「家族史」を試みてみた。

人それぞれの「家族史」があり、それぞれの「体感」があるはずだが、自分にとって興味深かったのは、日本史の授業で学んだり、その後に勉強したりした日本社会の変動が、具体的なひとびと（曾祖父や祖父）の生き様を見ることによって説明され直す体験であった。様々な知識が「つながってゆく」快感である。しかもそのつながりは、まさに自分自身のあり方において像を結ぶ。

もちろん、問題はある。4 組 8 人いるはずの曾祖父母のなかから、父方の曾祖父･祖父をまず追った点。私は自分の「ルーツ」をまず男系の直系で考えていた。正直にいえば、例えば曾祖父 4 人のうち、父の父の父である先の「ネトウヨの曾祖父」と比べ、「父方の祖母の父親」や「母方の祖父の父親」、「母方の祖母の父親」は、自分にとってどこか縁遠いような気もしてしまう。その意味についてはまた考えてもいいだろう。またもちろん、家族史は時に差別に繋がる可能性もあるので、慎重に扱う必要があるものでもある。つまり、このような「家族史」は、興味深い「体感する歴史」の一方法でありながら、「血」のつながりを強烈に押し出してしまう方法であるということである。

ただそれでも、ある時代の社会変化を具体的な人物を通して知ることの意味は大きい。そうした作業は、それが自分のありようを考えるために重要なことなのではないか。

そういえば、以前通っていた英会話学校のアメリカ人教師から、そのルーツが、東南アジアの山岳民族（苗族 miaozu）だと聞いたことがある。彼は高校時代、自分のルーツについて必死に調べたそうだ。生来のアメリカ人である彼は、もはや自分の名字を漢字で表記することができないのだけれども、ルーツを探る作業が、彼のアイデンティティ形成にとってどれだけ重要だったかは想像するに難くない。